

和 崎 春 日*
WAZAKI Haruka*



カメルーン最大都市ドアラにおける中華街の形成と文化遺産 —アジア—アフリカ関係急発展のなかの中国—カメルーン間の交流動態

The relationship between the genesis of Chinese Town and the preservation of African cultural heritage in Douala, the largest city in Cameroon

— The dynamism of exchange between China and Cameroon at a time of rapid and enormous development of exchange between Asia and Africa

1 はじめに

—発展したカメルーン—中国関係と 大量の中国要素のカメルーン流入

カメルーンやアフリカから見ると、中国は日本・韓国とともにヨーロッパ・アメリカとは異なる希望の地である。植民地的な歴史関係を脱した乾いた関係として、商業や経済のチャンスを獲得できる新たな対象の地である。中国との関係を強化したいと思っているアフリカ諸国は多いだろう。2000年、中国アフリカ協力フォーラムに参集したアフリカ諸国首脳の膨大な参集の姿を見ても、それがわかる。民衆レベルでも、アジアへ東アジアへ中国へと、商売の成功を求めて渡るアフリカ人が近年極めて多くなっている¹⁾。中国・広州はその代表的都市である(写真1)。

逆に、この発展した中国—カメルーン関係に乗って、カメルーンにも多くの中国の人・もの・コトが来るようになった。その大量の中国の流れは、カメルーン最大都市ドアラのもっとも繁華街で目抜き通りであるアーマドゥ・アヒジョ大統領通り(通称アヒジョ通り)に、怒涛のように訪れている。その中国文化のアヒジョ通りへの大量流入によって、古くからのフランス人経営の時計店が消え去り、中国人経営のビ

ルが建ちつつある。アヒジョ通りの歴史的姿が消えていきつつあり、それに代わる中国要素で満ち始めている。つまり、中華街の形成を今、実際のプロセスとして調査・検証できる貴重なケース・スタディを、私のこの研究は、実践していることになる。その実際を示すことが本稿の第1の目的である。この大量急峻な中国流入は、伝統ある街並みを破壊しているのか、新文化を創造しているのか、文化や伝統の継承はなされないのか、これらを問うことが本論の第2のテーマである。カメルーンの代表的都市の文化歴史を形に、文化歴史を記憶に、の両効能を問う。この問いは、有形文化財と無形文化財での文化継承のあり方を問うことにもつながってくるだろう。



写真1 中国・広州の衣服店で買い物を
するアフリカ人女性

*中部大学国際関係学部中国語中国関係学科

まずは2章で、マクロな中国－カメルーンの関係の強化発展の歴史を跡づける。この作業もあまりなされていない検証である²⁾。そして3章で、カメルーン－中国関係が発展したからこそ起こる利点と問題点について考察する。4章で、その中国流入がカメルーンの最大都市ドアラの最大目抜き通りアヒジョ通りの店舗商業動態にいかなる変化をもたらしているのか、考察する。5章で、中華街の形成と街並み保存の関係を問い、それを総じて「むすび」結論で、文化破壊と文化創造と文化継承の関係を問うて理論化したい。そして、このカメルーン－中国関係の発展の考察は、世界史的に見て、今までの歴史にない、旧宗主国ヨーロッパを手続き的にも経路的にも省略した、まったく新しい増強化されたアジア－アフリカ関係の到来に依っていることも確認したい。

2 カメルーン－中国関係の発展

2-1 カメルーン－中国関係の急激な増大の歴史的経緯

一方の中国から見ると、全体として第3世界、南側社会、アフリカへの関心と関与の増大が顕著になってきたのは、1971年以降のことである。この趨勢が、1997年まで続いて発展し、その傾向は今も拡大・発展し続けている³⁾。

カメルーンとの関係で見ると、1972年に首都ヤウンデの南にあるバルマヨに、中国の援助でバルマヨ医療病院を建設した。中国人医師が常駐し、西欧医療をほどこした。1973年には、文革以降ではアフリカ諸国の先陣を切って、初の大統領訪中を Ahijo アヒジョ大統領がはたした。このときは、東西両陣営への両面外交で、大韓民国大使館も朝鮮民主主義人民共和国大使館もこの時期に設置された。1976年には、南部のバルマヨ病院と対をなす形で、北部カメルーンにギデル病院を中国の援助で建立した。ギデルは、近くにセメント工場などがあり、北

カメルーンで労働者が集中してくるところである⁴⁾。1977年には、ヤウンデの大統領宮殿を中国が建てた。この流れが今日まで広くアフリカ諸国の大統領宮殿や国会議事堂、または国立スポーツ競技場などの建設協力につながっている。

1982年には、水力発電プロジェクトで7500万ドルの借款を中国が拠出している。1984年には、経済のみならず文化面での交流が進み、中国－カメルーン文化協力協定を締結している。1985年は、カメルーン－中国の協力関係にとって、これまた大きく象徴的となる国会議事堂 Palais de Congrès の建設を中国がおこなった。1993年には、中国の外務大臣がカメルーンを訪問している。そして、ついに Li Peng 首相が1993年にカメルーン訪問を果たした。この首相訪問が大きなターニング・ポイントとなり、両国の協力関係が急速に拡大していくことになる。

2000年、第1回 F O C A C 中国アフリカ協力フォーラムが開催され、アフリカのほぼ全首脳が出席した。これはアジア－アフリカ関係にとって、歴史的に画期をなす。日本はアフリカ外交に関する限り、中国に圧倒的な差をつけられた、と言ってよい。これを受けて、同年、中国貿易促進センターがカメルーン最大の国際貿易港であるドアラに開設された。2002年には、Zhu Longji 首相が再びカメルーンを訪問している。このとき、中国－カメルーン間の貿易協定を改定・促進し、第2次調印をおこなっている。2006年には、中国カメルーン観光旅行対象国協定を調印し、両国の観光による移動を行いやすくしている。2010年には、経済、観光から、より包括的、全面的な2国間協力に踏み込み、8部門協力協定に調印し、中国が30億 C F A を拠出している。経済、医療、学校、宗教を含む文化、教育、興行などの諸部門に広がっている。2011年には、中国副首相がカメルーンを

訪問し、農業と教育の分野で、さらなる協力進展を図った。

この間、カメルーン大統領 Paul Biya の中国訪問は、4 回を数える。2000 年、2003 年、2006 年、2011 年である。いわば中国「詣で」を 4 回もおこなっている。Biya 大統領は次のようなステートメントを発している。「中国プロジェクトは、わが国国民の社会経済的条件の改善に大きな影響を与えた。そしてカメルーン国民の大多数から賞賛を受けている。中国は、わが国にとって最も安定し最も信頼にたるパートナーの 1 つである」。

こうしたカメルーン—中国間の分厚い交流の積み重ねによって、具体的な大インフラ・プロジェクトがカメルーンで次々と計画され、また実現している。2014 年には、クリビ港湾整備事業がスタートした。2016 年には、メキン水力発電プロジェクトが完成した。同じ年にベルトア・ダムが完成した。2017 年には、Memvele ダムがほぼ完成を見た。こうしたハード面での中国の援助が矢継ぎ早に成就して行くのと平行して、2016 年には人の移動の障壁をとりのぞく作業が進められた。ヤウンデで、両国の職業パスポート所持者は、相互にビザなしで入国し合うことを認め合った。インフラにかかわるカメルーン政府仕立ての構造プロジェクトのなんと 71% に中国企業が参画している。したがって、中国は、今や、カメルーンにとって最大の貿易債権国となっている。

2-2 カメルーンの貿易相手国

そのカメルーンの貿易関係を見てみよう。WTO（World Trade Organization）が出した Trade Profiles from 2006 to 2012 を見てみよう（表 1 参照）。ここでは、主要な 3 つの貿易相手を上げて比較している。EU と中国とアメリカ US である。カメルーンは 19 世紀後半から、最初ドイツ次いでイギリス、そしてフランスという

ように領有化されてきており、この植民地時代から、そして、独立以降の関係を見ても、ヨーロッパとは深い関係にある。最近の植民地化の宗主国でありそこから独立したフランスとの関係が特に密である。

植民地化以前でも、ポルトガルやスペインの大航海の海運の影響がここまで伸びていた。カメルーンという国名は、ポルトガル語でカメラオンつまり海老から来ており、ヨーロッパが「世界を発見」していくエネルギーが、今のドアラあたりに到達したとき、ドアラ港湾の近くウーリ川の河口に、海老が飛び跳ねるように海面を覆っていたことに拠っている。

こうした国名の由来から、その外国起源の歴史的ヨーロッパ支配の「影響」から自立するべく、国名を現在のカメルーン共和国の多くの地方を流れ覆うサナガ川の名をとって、「サナガ共和国」にしようと議論するカメルーン人知的指導者もいる。ヨーロッパに植民地化された他のアフリカ地域でも、このような思想的経緯で、フランス語でボルタ川上流を意味するオート・ボルタ国は、フランス支配から脱するべく、地元の名前ブルキナファソへと国名を変えた。チャドの首都であったフォール・ラミー（フランス語で「ラミー将軍の砦」）をやめ、地元の地名ンジャミーナに変えた。いまわしいヨーロッパ支配の歴史から脱しようとしているが、ヨーロッパもそのハードな支配関係をオブラートに包んだ利益や援助の供与関係にソフト化し支配パイプを継続しようとしている。

こうした歴史的に長く緊密なカメルーン—ヨーロッパ関係から、輸出入の貿易関係でも、アメリカや近年影響を増そうとする中国に差をつけて、EU（Europe Union）が貿易額 1 位であり続けている。ただ、その全体の中の割合で、全体の 7 割を占めた輸出額（2006 年から 4 年間 75%）が、全体の 55% ほどに急落してきている（2010～2012 年は全体の 55%）。これに

表1. Cameroun's Merchandise Trade with US, EU and China, 2005-2012 (million \$)

				By destination / origin														
				European Union					China					US				
Year	Total exports	Total imports	Balance	Exports		Imports		Balance	Exports		Imports		Balance	Exports		Imports		Balance
2005	2829	2885	-56	1870	66.1%	1070	37.1%	800	79	2.8%	150	5.2%	-71	130	4.6%	141	4.9%	-11
2006	3573	2990	583	2655	74.3%	1011	33.8%	1644	121	3.4%	188	6.3%	-67	229	6.4%	87	2.9%	142
2007	3604	3760	-156	2678	74.3%	1316	35.0%	1362	123	3.4%	237	6.3%	-114	231	6.4%	109	2.9%	122
2008	4350	4360	-10	2332	74.3%	1526	35.0%	1706	148	3.4%	275	6.3%	-127	278	6.4%	126	2.9%	152
2009	3000	4250	-1250	2229	74.3%	1488	35.0%	742	102	3.4%	268	6.3%	-166	192	6.4%	123	2.9%	69
2010	4000	4850	-850	2208	55.2%	1528	31.5%	680	340	8.5%	514	10.6%	-174	228	5.7%	160	3.3%	68
2011	4600	6500	-1900	2539	55.2%	2048	31.5%	492	391	8.5%	689	10.6%	-298	262	5.7%	215	3.3%	48
2012	4500	7300	-2800	2453	54.5%	2438	33.4%	14	689	15.3%	759	10.4%	-71	189	4.2%	256	3.5%	-67

Source: World Trade Organization, Trade Profiles, from 2006 to 2013.

対して、歴史的な新参者でありつつ世界経済第1位のアメリカは、カメルーンからの輸出額が6%程度の関係を占め続けてきた。が、近年4%まで輸出額は低下してきている。輸入額も4%から3%ほどに低下してきている。最新参の中国とは、その輸出入の貿易額の変動がきわめて大きい。輸出入ともに2005年ころ3%、5%であった輸出と輸入がともに10%、15%をこえるまで急増してきている。中国がアメリカを抜いたわけである。

EUやアメリカと比較する形で3極比較を行ったが、カメルーン—中国の貿易関係を貿易全体から見てみると、香港バプティスト大学のJean-Pierre Cabestanは、次のように分析する(要約文を下に記す)。

EUは、急落したとはいえ全体の中での割合で言えば、大きなシェアを一応保ち続けている。上で見たように、中国との貿易関係は急に増大している。2012年、中国との取引はカメルーンの輸入全体の18.9%を占め(\$1186million)、輸出全体の15.2%を占める(\$819million)。カメルーンの中国との取引は全体の17.2%を占め、近年の隣国との貿易交流国ナイジェリアとの7.4%を超え、EUとの全

取引39.9%の約半分を占めるほどに急増している。どの分野でも、この10年間に中国との取引を10倍に増やしており、この勢いは続きいずれEUに追いつくものと見積もられている。

カメルーン—中国の貿易は、南北関係の典型的モデルのようになっている。というのは、中国はカメルーンから1次資源 raw materials を買い、カメルーンは中国から製造品や消費物資を買うからである。中国のカメルーンからの輸入は、原油の購入の増大が一挙に増え、2008年以来その傾向が著しい。2012年には、原油輸入は、中国のカメルーンからの輸入の62%を占めるまでになっている。2006年と2008年には、中国へのカメルーンからの原油輸出は、貿易不均衡とまで指摘できるくらいに大きくなった。しかし、この流れはすぐにひっくり返り、中国の輸出超過、カメルーンの輸入超過の流れとなった。中国からのカメルーンへの輸出製品は、電気器具、繊維衣類、靴類、バイクやトラクターなどの乗り物、機械電器、セメントなどが主なものである。中国から食料製品の輸入が多くあった時期もあるが、2003年以来、カメルーンの中国からの穀類の買い付けは下降し、機械類や生産品の割合が上昇した。総じて、カ

メルーンは、中国との貿易アンバランスに不満を持っている⁵⁾。

3 カメルーン—中国交流のなかで起こる諸問題

3-1 中国人の流入分野の広がりとかメルーン民衆文化への浸透—首都ヤウンデ

大まかな推計だと、この10年間にカメルーン在住の中国人の数は、2万人から20万人に増えたといわれる。少し厳しく見積もっても、5万人に増えたことは間違いない。毎日の経済的やりくりに今まででも苦しんでいるカメルーンの地方民衆との路上ミニ商売での「アンフェア」とカメルーン人には映る競争を含めて、在カメルーンの中国人の経済活動はきわめて活発になった。カメルーン民衆の憤慨が増している、とメディアは伝える。2000年までは、中国人のカメルーンへの移住は、限定された領域・分野だった。目立ったのは、中華料理店レストラン、中国医療、卸売りの分野ぐらいだった。ところが、この10年間で、多様な分野へと移住は拡大し、卸売りはもちろん、貿易、農業、漁業などの分野で広がった。

葛藤は、ヤウンデの路上での中国人のポップコーン・ドーナツ売りの安売りと売春への不満から発して、ドアラでは殺傷事件まで起きている。農業分野への中国人の進出は、土地の商業的利用が進みすぎて、NGOも「外国人」（と表現する団体もあるが中国人を指している）への急速な土地借用は、農地の短期間での荒廃につながると警戒する。

中国人商人たちは、犯罪者にとってより襲いやすい簡単なターゲットであるように見える。中国人通商者たちは、しばしば多額の現金を持ち歩いているからである。中国大使館によると、中国人をターゲットとした暴力事件が急激に増えている。2005年2月には、カメルーンで初の中国人殺害の事件が起こった。これに対して、

400人以上の中国人が首都ヤウンデの通りを、中国人にむける暴力への抗議と警察当局のこうした犯罪調査に対する進展のなさへの抗議を表して、デモ行進した。また、中国人同士の犯罪も起こっている。2008年11月には、6人の中国人が中国人女性1人を襲い、被害女性は病院に搬送された。被害者は「カメルーンでの中国人同士の関係は健全ではない。私はカメルーン警察当局に呼ばれ、もっと状況に注意をするよう要求された」と語った。彼女を襲った6人のうちカメルーン陸軍の高官夫人とつながりある者がいると言われている⁶⁾。

3-2 カメルーン民衆、中国民衆ともにたまる不満と葛藤関係—地方都市

1971年のカメルーン—中国の公式の外交関係樹立時の頃は、カメルーン国内に数十人の中国人しかいなかった。大規模な中国人商人やビジネスマンのカメルーンへの移動・流入は、1990年代中頃から始まりその勢いが増している。2006年までに、中国の公式の通信機関である新華社通信は、概算で1000人が住んでいた、と見積もっている。そして2008年までには、この数字はおよそ倍ほどになった、と見ている。さらに近年では、上述したように、カメルーン在住の中国人の数は、5万人～数万人いるのは間違いない。

首都ヤウンデと最大都市ドアラだけではなく地方都市でも中国人の数が増加している。それにとまって、中国人と地方商人や町村の地元販売人たちの葛藤も増えている。カメルーン北西部にあり英語圏の最大都市バメンダでは、小麦粉を油で揚げて作った軽いパン状のベニエ（フランス語で揚げパン）が「チャイナ・ドーナツ」（Beignet Chinoise）として路上で作って売られている。カメルーンの民衆は、カメルーン当局が自分たちカメルーン人には税金を課して取りたてていくのに、中国人の商人たちに

は税金を課していない、自分たちは追い立てられさえする、と不平を当局に訴えている。地元民でも、安いほうありがたいことというのはもちろんあり、中国人から買っていく。一方、中国人に商店や店舗や商売の場所を貸すパトロンとなることを拒んで、カメルーンの村のオバサンたちだけから商品を買うカメルーン人もいる⁷⁾。

3-3 インフラ工事現場・鉱山・漁場での葛藤と中国・カメルーン両国政府の公式見解

道路補修の工事現場でおこる地元と中国との関係や問題を、Tensions Rise Between Cameroon Workers, Chinese Companies, November 04, 2016, Moki Edwin Kindzeka は、次のように伝える。

カメルーンの Matomb では、中国会社とカメルーン人との関係に緊張（葛藤）が増大していることが論じられている。2016年、2つの中国系の道路補修会社にカメルーン人労働者が、より妥当な支払いと労働条件の改善を求めてストライキを行った。暴力的衝突がおきカメルーン政府はその仲裁に尽力している。ストライキを起こしたのは、首都ヤウンデの南80キロに位置する Matomb で道路工事を行っている the China First Highway Engineering Company の労働者たちである。このストライキの組織者は、組合リーダーの Wanyu Leonard で、彼の言によれば、労働者の要望が聞き入れられるまで、中国人監督者は眠れないだろう、という。「われわれは、給料が不当に低い。われわれの職種には敬意が払われておらず、住居費、宿泊地の居住条件、現地の食事や交通手段さえ、まったく未整備で配慮を欠いている。このようなプロジェクト労働は、常軌を逸している」「200人のカメルーン人労働者の3分の2は、正式の労働契

約を受け取っていない」という。

この中国の会社は、政治首都ヤウンデと最大都市で経済首都といえるドアラを結ぶ250キロのハイウェイ建設を請け負っているが、この会社のデモが首都と空港を結ぶハイウェイ建設を請け負うもう1つの中国系会社のデモへと拡大した。建設技師の Armand Balocock は、カメルーンの法的な労働基準でありカメルーン政府もその要件充足の要を確認している「カメルーン人の労働指導者を1人任命すること」を求めている、という。4日目に入ったストライキで、政府は危機回避のための会議を招集した。だが、カメルーン労働者たちは、政府だけとの折衝を拒否し、中国人責任者の出席を求めた。中国人スタッフは暴力沙汰のあった衝突の現場を離れた。カメルーン当局の警察が介入して負傷をおったり逮捕されたりしたカメルーン人労働者もいる。

これが今年の唯一の衝突ではない。2016年3月には、東部の Batara Oya の鉱山町で、金採掘の中国人労働者ばかり儲けて、地域の発展に寄与していないことに腹をたてたカメルーン人たちはタイヤを燃やし、建物を破壊し、中国人たちの一部に暴力を振るった。2016年2月には、カメルーン海軍が大西洋上の不法漁業者を拿捕した。その多くが中国漁船であり、このため地元漁業者との葛藤が多くもちあがり、外国船の漁獲あきりと地元漁港での価格上昇とが問題になっている。

これに対して在カメルーン中国大使館はコメントを求められたが、直接の返答はしていない。中国大使館の Wei Wenshua は、カメルーンにおける総じて1世紀に亘る中国系会社の活動についてコメントした。フランス語の通訳を通じて、「カメルーンの中国系会社は、あらゆる点で（法規から逸脱することなく）誠実にかれらの町と村での現場での仕事を、カメルーン人労働者の健康やインフラ整備状況自体も含めて、達成し

ている。中国系会社の仕事に満足している」と述べた。これに対して、カメルーンの労働大臣 Emmanuel Nganou Ndjoumessi は、道路工事カメルーン労働者のストライキに対する対話集会の責任組織者であるが、「中国系会社は工事満了引渡し日に追われ、必要資金の延着や行政手続きの遅延のなかでも努力し、なんとか引き渡しに間に合うように努力している」と述べて中国会社の努力を評価している。同大臣は、メディアの VOA（ボイス・オブ・アメリカ）のインタビューに対し「カメルーンはあらゆるパートナーと協力していくことを望んでおり、こうした取引の完了期間を達成できなければそうした会社との契約は即座に中止する」と述べている（以上、Tensions Rise Between Cameroon Workers, Chinese Companies, November 04, 2016, Moki Edwin Kindzeka）。

3-4 在カメルーン中国医療機関の増大と衝突

1990年代の中ごろから、2000年までに、カメルーンのほとんどすべての主要な都市に、中国の医療機関が「漢方」医療として設置されている。英語で TCM（Traditional Chinese Medicine）と呼ぶ。最大都市ドアラと首都ヤウンデには、それぞれ6箇所もある。このTCMの医療システムでは、クリニック、薬局、さらには移動式の移動医療スタンドもあり、複合化した有機的コンプレックスを形成している（写



写真2 アヒジョ大統領通りで
中国系スーパーと中国医療を掲げる店

真2)。カメルーン人たちの中国医療に向ける評判は、おおむね良い。「安いしその上よく効く」という。一方で、カメルーン人の民間機関の医師は「あれは擬似医療だ、公衆衛生当局はもっと規制を強く打ち出すべきだ」と対抗心を露にしている⁸⁾。ただ、マラリア減少運動を目標とするカメルーン政府やカメルーン民衆にとっては、中国医療は実際に抗マラリアとして良く効くというそれなりの評判を勝ち得ている⁹⁾。

3-5 ドアラ目抜き通りアヒジョ大統領通りへの中国流入

仏ジャーナリスト Serge Michel と Michel Beuret は、アフリカ各国への中国人の流入をめぐるドキュメンタリー・レポートを本にまとめている¹⁰⁾。Serge Michel et Michel Beuret, 2008 “La Chinafrique” (Grassette et Fasquelle) である。この書には、アルジェリア、ニジェール、カメルーン、コンゴ共和国、アンゴラ、ザンビア、ギニアなどアフリカ13カ国での中国人の最近の活動と中国－アフリカ交流が記されている。フランスでの元々の書名 La Chinafrique を直訳すれば、『中国化したアフリカ』『中国的アフリカ』『中国と一体化したアフリカ』とでも言うべきだろう。日本語の書名は、日本での「中国の世界拡大への警戒」という政治風潮を読み取って、『アフリカを食い荒らす中国』という扇情的な書名でラベリングしている。ここでは、事実だけを取り上げていこう。

この書のカメルーン・ドアラの報告には、ドアラでの中国のプレゼンスを次のように述べている（上掲書、166－176頁）。

ドアラ報告1：中国の援助であちこちにスタジアムができ、首都ヤウンデには巨大な総合体育館が誕生した。憲兵隊に30台の新品の護衛バイクを提供したのも中国だ。今は、健康面で上下水道の供給網の整備に取り組んでいる。さ

らに、マラリアに効き目のある漢方薬「黄花蒿（おうかこう）」をカメルーンにもたらしたのも中国人である。スイスの世界的製薬会社が高額でこの製薬権を買い取ってカメルーンに流布している。これまでの首都ヤウンデと最大都市ドアラを結ぶ交通網では、Garanti Expressなどの地元資本に、中国製のバスが投入された。今28台の中国製の新品大型バスが、ヤウンデドアラ間を走っている。道路工事で使われているのは、中大集団で製造された中国製の建造土木機械である。2006年10月には、ドアラへの人口集中とドアラの都市拡大にしたがって急造された住宅街カルチエ・ボナムサディの陸の孤島化と道路渋滞の日常化を根源から救済した、中国路橋工程有限責任公司C R B Cによるドアラ環状道路の補修の完成をみた。雨季には、「ドアラの地獄」と呼ばれて、郊外や周辺住宅地域から中心街に入る（から出る）ことは至難の技だった。これが解消・緩和された。FMラジオで流れているのは、2006年にドアラでなくなった中国人歌手リュウ・デュ・カメールの歌である。しかも、その歌はカメルーンが生み出した現代ポップ音楽マコッサに乗って歌われている。中国の日用品は、あまりにも破格の値段で商売に強い。服、靴、石鹸、シャンプー、かつら、ボールペン、オートバイ、ポンプ、発電機、電話、腕時計、ドラム缶、めがね、湯沸かし器、食器、玩具などである。中国製品がカメルーン中、アフリカ中の日常生活を覆っている（以上、上述書166－167頁要約）。

私の40年前からのフィールドワークのエクステンシブな調査観察の目視からも、1970年代80年代は、オートバイと言えば、ほとんど「100%近く」日本製だった。ホンダ、スズキ、ヤマハ、カワサキなどがオートバイ市場を覆っていた。西部州のフンバンの町の住人たちも、フンバンから少し北にありナイジェリア国

境に位置するマヨダレからナイジェリアに入り、ここでノックダウン生産されているホンダや日本製バイクを買ってカメルーンに帰ってくる、というのが常態だった。見える実態としては、100%近く日本製だった。だが今は違う。1990年代ころからとにかく安い中国製バイクが現れ、10～20年持たせるなら日本製だが、とにかく10年持ってバイク・タクシーでも出来れば十分と考えるカメルーン民衆が増え、値段が2分の1から3分の1の中国製が売れていた。今は、ドアラ市内をGalaxyやSaniliなどの中国製が走り回り、アヒジョ大統領通り近くのカルチエ街区では、中国製のタイヤや部品の店が軒を並べている（写真3）。

ドアラ報告2：2007年1月、胡錦濤がアフリカ諸国への初めての外交訪問で選ばれ訪れたのが、カメルーンだった。香港科学技術大学のダヴィッド・ツヴァイク教授は、「かつては帝国を拡大しようとおもえば国土を占領するしかなかった。今は、植民地化は必要ない。販売競争力のある商品をもつだけで十分だ」と言う。これで、被害をこうむるのは、カメルーン人ではない。今まで法外ともいえる中間マージンを乗せて売っていたレバノン人商人フランス人商人たちである。この点は、カメルーン人にとっても歓迎である。ただ、ベニエ（揚げパン）の販売では、中国人商人とカメルーン商人が衝突



写真3 中国製オートバイ SANILI とその部品を扱う店。
並ぶ店舗は全て中国製品を扱う

する。カメルーンのおバチャンたちは、50フランCFA（約10円）で売るが、中国人商人は路上の揚げパン・ベニエでさえ現地よりも安く40フランCFAで売る。ベニエ衝突は、新聞が各地の町でたびたび取り上げるようになっている。こうしたきわめて小さな商売での衝突が日常化してきている。カメルーンの民衆心理は、中国人は商売をジャマする、に向かいつつある。街頭の物売りや売春婦は要らない、とメディアは書く。ドアラには、カルチエ・エルフ・アエロポールやカルチエ・ヴィラージュなど貧民街を中心におよそ300人の売春婦がいるといわれている。このショートタイム売春の値段が1500～2000CFAフラン（300～400円）であり、対してカメルーン人の売春の場合は、最低でも5000CFAフラン（1000円）である。中国人売春の場合は、昼に上述の小商売をしているから、夜の値段でも「値下げ」が可能なのだ、と民衆はいう。熟練工、医者、エンジニアの中国人は要るが、粗末な商品商売と売春は要らない、という¹¹⁾。

中国人女性の場合に対して、中国人男性は、ドアラ中心地のドゥーシュ（フランス語でシャワーの意味）と呼ばれる15ヘクタールの地域を中心に入り込んでいる。1960年代に、植民地化による邸宅を改造して公共シャワー施設がここに建設された。現在はこの建物は廃墟化し、アーマドゥ・アヒジョ大統領通りからカルチエ・コンゴへの入り口がドゥーシュと象徴的に呼ばれている。より正確に言うなら、この交差点あたりは、ドゥーシュ・ミュニシパル地点である。このあたりは、焼けたプラスチック、小便、腐敗物、残飯の放りかす、などによる異臭が漂うところである。貧しい多くは内陸部出身の中国人が廉価な住居費を求めて、このあたりに多く住んでいる。中下層のカメルーン人でさえ、このあたりに住む中国人を「べらぼうに安い値段で借りて、10人から14、5人が一緒に

住んでいるよ」とルックダウンしたかのように評する。ここに住む中国人は、かご網み、皮なめし、あやしい宝石加工などをして、現地の製造業者や販売業者と競っている（以上、上述書167－170頁要約）。

上述書の著者フランス人ジャーナリストたちは、この地区を極めて危険としている。私は、西部州のバムン県のバムン人社会が主たるフィールドであり、そのバムン人たちがドアラに来て移り住むのがこのドゥーシュ地区やカルチエ・コンゴだから、この40年来いつもこのホテルかバムン民衆宅で寝泊りしていた。私にとって「普通の民衆街」だが、中国人の若者がカメルーン人の一団によって刺し殺されて以来、ドゥーシュ・ミュニシパル地区では中国人への暴行が後を絶たない。ドアラに住む中国人には、警察による法外な家宅捜索、税務当局によるこれまた厳しい取立てが行われた、と中国人は主張している。貧しい下町地区であるから、中国人のビルオーナーや経営者は、屈強なカメルーン人をボディガードとして雇っている。アヒジョ通りの裏通りやドゥーシュ地区に多く住むバムン人の私の友人も、私が泊まったドゥーシュ前のホテル大中華酒店 Hôtel Juliette のボディガードをしている。警官のような制服を着せられゴツく屈強（フランス語で「コスト」）である（写真4）。



写真4 ドゥーシュ前の中国系ホテル大中華酒店に雇われたカメルーン人ガードマン

もちろん、ビヤ政権の中国接近に警鐘を鳴らす政治家や指導者も多い。植民地化の酷さやそれを引きずった現代のフランスをはじめとするヨーロッパのアフリカ支配は、実質的にも心理尊厳的にも問題が多い。憤激を感じているカメルーン人は、政治リーダーにも民衆にも数多い。ポスト・コロニアリズムが今も継続する。欧米以外のオプションの登場は待ち望まれていた。だが、カメルーンのアピニオン・リーダーのなかには、「西洋よりマシ」という論理だけではもう立ち行かない段階に入った、と分析する者が現れている。こうして、ビヤ政権も、近隣ナイジェリアやトルコ、チュニジアといった新興協力国との関係も強化して、多角的な国際関係を作ろうとしているところがある。

こうした懸念があるものの、やはり他方で、今日までの中国との交流関係の発展は、60%は地元カメルーン人を雇うという「標語」化した取り決めを誠実に実行しようとする Huawei のような地元にも評価の高い中国系会社もある。さらに、中国－カメルーン両国政府の協定により、中国人は契約がなくても1年半滞在できることになった。他の外国人にはない中国人だけが持つ特例である。この結果、北京のカメルーン大使館には、2007年2月までに20万件的ビザ申請がなされた。中国－カメルーン間の交流の急増発展にさらに拍車がかかっている現状である。

4 カメルーン最大都市ドアラの目抜き通り Boulevard du Président Ahamadou Ahijo アヒジョ大統領通りの商業動態－文化生成と文化財保存との関係

4-1 アーマドゥ・アヒジョ大統領通りの商業店舗動態

アヒジョ大統領通りの店舗を可視的に観察調査した(写真5、図1+拡大地図)。1976年

以来20回を越える回数で都市ドアラを観察調査してきているが、その当時この Boulevard du Président Ahamadou Ahijo アヒジョ通りの店舗は、ほぼ全てと言って良いくらい、カメルーン最大の商業民族バミレケか通称「レバシリ人」(レバノン・シリアの短縮形だが、ドアラの実際はキプロス、レバノン、ギリシャ人商人)の所有だった。フランス人のもつ店舗もあった。これを所有か賃貸かはともあれ、1軒ずつカメルーン人の店舗か「レバシリ」人の店舗か中国人の店舗かを、可能な限り確認していった。不明な店舗も多くある(図2参照)。図では、中国人の借り入れなり買取なりが判明した店舗を「中国」や「中国人」と表示している。図の道路の右側が居住地表示で言う偶数番地、左側が奇数番地となっている。

図の上部が方位上の東南、下部が西北にあたる。アヒジョ通りは、図の下部の1ブロック先に(1ブロックの右左は未調査)これも目抜き通りの Rue de la Liberté リベルテ(自由)通りと交わる。その交差点にかつてフランス・パリのスーパーTATIが立地していた。通りの図の上部にドゥーシュと呼ばれる3路交差点がある。図のドゥーシュを右折するとドゥーシュ・ミュニシパル地区、カルチエ街区の名前で言えば民衆街カルチエ・コンゴが広がる。そこにドアラ最大の中央モスクや中央市場がある。さらにその先に行けば、ドアラ空港に隣接する、同



写真5 ドアラの2大目抜き通りの1つ、アヒジョ大統領通り

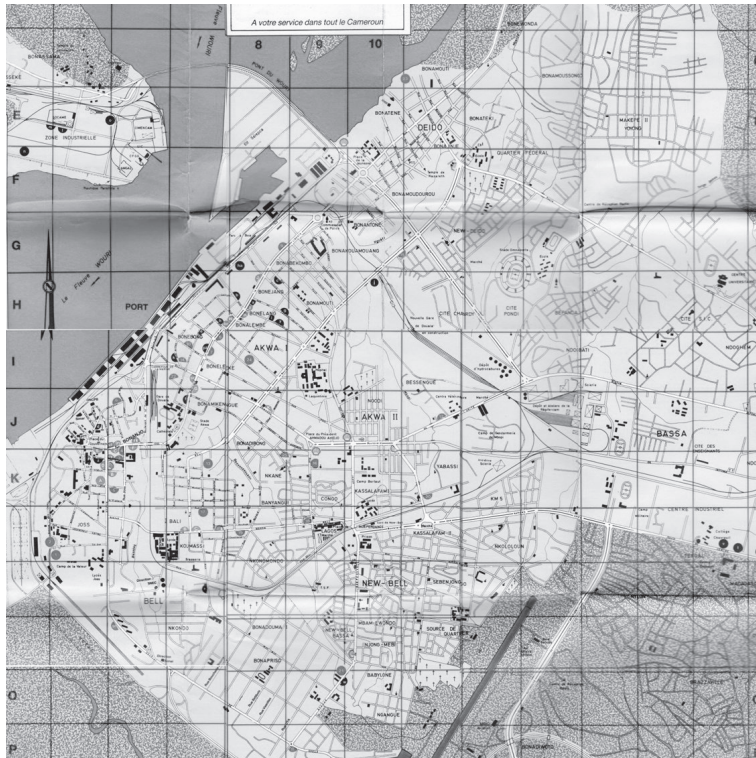


図1 ドアラの都市地図ー左上が港、右下の直線が滑走路・飛行場
1マスの縦1500m 横1500mの縮尺



<図1 拡大図> ◀ がリベルテ通り ▶ がアヒジヨ大統領通り ○ が行政区

	Residence Hotel 大中華飯店	Hotel 大中華飯店	ere Sainte Juliette 大中華飯店	看板
	店舗	国籍		
パミレケ	金茂国際	1484	中国人	
	商貿中心	1482	中国人	
	布・織物	1480	中国人	
National Voyage	バス・ステーション	バス ステーション	Sager Narrel	
	Energizer 1411	Happy Boutique	カメルーン人	
レバノン人	発電機 1409	1352 靴屋	カメルーン人	
	CHINA TOWN	めし屋	カメルーン人	
看板	Centre de Commerce	Central Voyage		
靴マーク	1405 Chinois	靴屋	チャン出身 カメルーン人	
中国人	靴・カバン 1397	マットレス屋	カメルーン人 国旗 カメルーン	
カメルーン	靴・サンダル 1395	1276	奥に18軒 中国商人	
中国	1軒 カメルーン3軒	中国国旗-カメルーン国旗 PauBia大統領写真		
中国人	7軒 GFEDCBA	1268 倒置マーク	中国人	
中国人	7軒 HIJKLMN	1260	カメルーン人	
中国人	Hua Shang1381	1258ワイヤー電線	Baffoussann人	
中国人	1377	1256	カメルーン人	
中国人	1375	1254	中国人	
Baffang人	1369	1252	カメルーン人	看板
奥32軒・カメルーン 23軒中国	ミニ靴屋	1250 唐城	中国	CHINA TOWN
	Express Union	CHINA Town	中国	唐城
中国人	1357	1244	カメルーン人	
中国人	1347	1242	カメルーン人	看板
中国人	1341	1240	カメルーン人	
中国人	1337	1238 中略桂帽		
パミレケ人	モーター・電源1327	1236 中略桂帽		
カメルーン	カベ板・建材1317	1234 商業城		
中国人	絵ナベ簪1311	1232	中国人	
中国人	1305	1230	カメルーン人	
6軒中国人 奥		1228	カメルーン人	
中国人	1301	1226 花屋 造花	カメルーン人+中国人	
中国人	1299	1224	カメルーン人	
カメルーン		五星光旗		
カメルーン		1220		
中国人	テレビ 毛布 1294	中国商城	中国人	看板 中国商城
United Bank for Africa		CHINESE SHOPPING CITY		
中国人	非州聯合銀行	カメルーン人		
中国人	漢字電光サイン	カメルーン人		
カメルーン	○商城内	1216歓迎惠顧		
カメルーン	Boutique a Louer	1214	カメルーン人	
カメルーン	Money Gramey	貨物比選 二樓 烟酒 日用品		
カメルーン	遠近金 遠近款	惠 中国超市		
カメルーン	Boutique a Louer	市 中国超市		
中国女性	カメルーン人靴屋	市 中国超市		
奥 カメルーン民衆街		清洗 修理 空調 9922-9645		
中国人	1267	SKT Electrique	レバ・シリ人	
中国人	メシ屋	SKT Electrique	店舗改修	
中国人		生		
中国人	1251	工事中		
中国人	1249	SIETEL		
カメルーン	室内装飾品	1156	中国人	
Baham人	NZIKI FILS	1154	中国人	
	IMPEX CAM		カメルーン人	
非中国		1124	カメルーン人	
非中国	Sports Center	1102	中国人	
レバノン人	Quinquerie	1088	中国人	
レバノン人	バスのタイヤ	1086	中国人	
中国人	金具 タイヤ	和 和平飯店		
中国人	Bike	市		
中国人	Express Exchange	Wai Chang	中号人	
中国人	SHINO	Aluminium	中国人	
中国人	AFRICA	Money Express	カメルーン人	
中国人	PLATFORM	コピー電話サービス		
	工事中	1074	中国人	
	工事中	1072	カメルーン人	
	工事中	1070	中国人	
	工事中	1068	カメルーン人	
道路				
	カジノ ルーレット	1060	a	
	新聞	1058	中国人	
	カジノ ルーレット	1054	カメルーン人	
	Cmpaanerd II	1050	カメルーン人	
カメルーン	Pharmacie	工事中、奥	メシ屋 カメルーン人	
カメルーン	de Douala	1.014	中国人	
	中略友好樓	1012	中国人	
	中略友好樓	1010	カメルーン人	
	中略友好樓	1008	カメルーン人	
	中略友好樓	1006		
	中略友好樓	ガソリンスタンド		
	中略友好樓	ガソリンスタンド		
		道路		

図2 アヒジヨ通りー上の○がドゥーシュ

様な下町または貧民街または民衆居住地区のカルチエ・ニューベル New-Bell が広がる。北側・欧米の用語で言えば、多くが「スラム」と表現される。川べりや線路際には40～30年前多くの掘っ立て小屋が建っていた。「スクォッター（不法占拠地）」の分析語彙で北側が呼ぶ家屋群の地域である。今は、ここには線路や駅等の鉄道施設などないが、この街区には今でも「鉄道薬局」Pharmacie de Rail と呼ばれる薬局があり、乗り合いタクシーに乗ったとき「Pharmacie de Rail」といえばこのあたりで降りしてくれる。ドアラ都市民衆の下町地区を示すランドマークの1つになっている。

中国とカメルーンをつなぐ金融機関や国際的な商業機関も出店している。換金・金融機関としては、Express Union と Money Gram と非州聯合銀行 United bank for Africa が出ている。Money Gram はわざわざ中国語で速汇金、速汇款と謳っている。United bank for Africa も中国語で非州聯合銀行と表記を表に出している（写真6）。民衆的な町金融に近い Express Exchange や Money Express がある。そして、ひそかに換金商売をする人も多い。

カメルーン国内の2大都市ヤウンデとドアラを結ぶバス・ステーションも3つある。Sager Narrel と Central Voyage と National Voyage の3つのバス運行会社がアヒジョ通りに面する。大

都市であるだけに、何処と何処、何と何を結ぶかというその結節の領域や関係性は、国内同士もあれば、ドアラと都市近郊の小町・村との関係もある。そして、カメルーンの国内と海外を結ぶ結節性もある。

今は、その国際性の対象国のほとんどを中国が占めるという、極端な国際性を示すに至っている。もちろん、店の属性としてみれば、「レバシリ」と称するレバノン、キプロス、ギリシャ人が所有する商店もある。かつては、パリのBarbes 駅にある有名スーパーTATI が立地していたこともある。その国際性の中味が、どんどんと中国へと変わってきている。カメルーンの地元スーパーの Score だったものが、今はインド資本の Mahima に変わってしまっている。こうした新しい外来資本の進出も確認できる。これは、国際多様性である。

だが、ショッピング・センターはアヒジョ通りで確認できた全店舗が中国資本である。この集合的な商店群やショッピング・センターは、姉妹超市、中国唐城 China Town、金芝国際商業中心（写真7）、中国商城 Chinese Shopping City（写真8）、中国超市、貨恵超市、和平超市と、地図にはないがもう少し図の下方にあるインド系のスーパーマーケット Mahima を除いて、ここでは全て中国系である。カメルーンと中国を結ぶと謳った大規模店は、漢字で中国は



写真6 United Bank for Africa は漢字で「非洲聯合銀行」と併記される



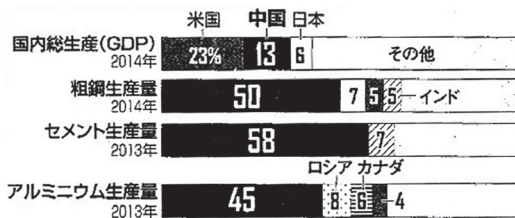
写真7 交通の要バスターミナルの隣を占める「金芝国際貿易中心」



写真8 中国商城の前をカメルーン人が働いている



写真9 中国－カメルーン友好を謳う「中喀友好楼」



資料1 中国が世界に占める割合は？



写真10 世界1位の生産量を誇る中国アルミニウムを扱う中国系店舗

「中」、カメルーンは「喀」と表記している。カメルーンは漢字で「喀麦隆」だからである。「中喀桂帽商業城」がある。「中喀友好楼」もある(写真9)。カメルーン国旗と中国国旗を道路に重ねるように並べている店もある(写真6)。ここではカメルーン－中国両国国旗の真ん中にポール・ビヤ大統領の写真を置いている。現在のアヒジョ通りは、五星紅旗に満ちている。またフランス語で Sino-Afrique Plate-form と中国アフリカを結ぶプラットフォーム性を看板に出して交流関係を謳っている店もある。

中国が得意とする商業領域の店もある。Wai Chang Aluminium の店があるが、アルミニウムは中国が世界の50%ほどの生産量を誇る得意分野である(資料1、写真10)。中国語の標語も多く観察できる。「歓迎惠顧」や「二楼 烟酒 日用品」と2階の店に酒タバコや日用品を置いていることを宣伝している看板もある。中国人が経営するホテルも、たった1つの通りに建造中のものを含めて3軒もある。1つは巨大である。1つは中規模ホテルである。建造中の1つも巨大である。アヒジョ通りには他にも中国系のビルで建造中のものもある。今あるドゥーシュのすぐそばに立っている大きい Résidence Hôtelière Sainte Juliette 大中華酒店は、この建物の骨格に長い歴史を誇っている(写真11)。それを改築・改装している。隣にあった映画館と



写真11 左がドゥーシュ。その前の大中華酒店はカメルーンホテルを買って建てた

ともに中国人が買い取り、一緒に改築している。およそ半世紀以上前から、実際の宿泊経験も含め、私が確認しただけでも40年前からここにバミレケ人経営のカメルーン・ホテル Cameroon Hotel があった。ドアラにある他のフランス系の IBIS ホテルや同じバミレケ経営のアクワ・ホテルが高級だとすると、カメルーン・ホテルは「中の上」級ホテルだが、カメルーン西部のバミレケ人、バムン人、北部のモスレム系のハウサ人、フルベ人の経済的にゆとりある富豪や商人たちが宿泊していた。カメルーンの伝統的なバムン王国やバミレケ首長領の王や副王たちも、ここをよく利用した。ドアラ最大モスクの中央モスクがすぐこのドゥーシュ・ミュニシパル地区にあり、中央市場もその横に隣接してある。宗教的にも商業的にも利便性の高い地域である。この近辺で‘Al Haji’「アラジ」とメッカ巡礼者に対する尊称を大声で呼べば、10～20人は振り返る。

この隙を埋めるように、カメルーン民衆の借家や飯屋、小商店、路上商売が展開している。民族でいえば、バムン、バッサ、などが多く居住している。彼らは、歴史的に長くアヒジョ通り近辺にすんでいる住人である。15年前にドアラ調査を行ったが、ここでの民族内互助結社

の活動では、バムン結社プオムシャ・ブワーにバッサ人が加入していた。後ろで詳細に分析しよう（表2参照）。アヒジョ通りのドゥーシュから右に曲がりカルチエ・コンゴのほうに行くと、一気にカメルーン人ではハウサ、フルベ、バムンのノルディストと呼ばれる北カメルーン人が多くなる。北カメルーンでは、ほとんどがモスレムである。ここには、ドアラ最大のモスクが立地し、フランス語圏のマリ人、ギニア人、セネガル人等、西アフリカ出身者も多数居住している。アラビア語、ハウサ語、フルベ語、フランス語、バムン語が聞こえてくることが多い。ミェッザーンの宗教的な呼びかけの朗読もアラビア語で聞こえてくる。ドゥーシュとはそういう地域である。民衆飯屋もアヒジョ通りをふくめてこのあたりに多い。料理店ではほとんど表示していなくてもハラール食材である。ここでは、イスラームの衣食住が当たり前だから、わざわざハラールと謳っている料理店は少ない。マリ人経営、ハウサ人等経営の料理店に入れば、イスラームにのっとった料理が出てくるからである。中国人経営の大中華酒店のレストラン大中華餐庁でも、朝食のオムレツなどのハムには豚を使わない。カメルーン人のモスレム客を意識しているのである。カメルーン人の客からも、

表2. バムン「私は故郷マンキを忘れない」講のメンバー構成

出身とその指示範域			
マンキ村		マッパ町	フンバン市
マンキ1	マンキ2	マラントウアン町	カルチエ
マファムヤ		マゲット村	・マンベン
マゲンファ		フラップ村	・マヨム
マンキ・シェフリ		マヤップ村	
ンジサム・マンキ			フンボット市
マシュマヌ			
マッシュビ			
マモングオプソ			
マヤル			
マンキからの距離・範域の拡大 →			
バムン	16	ハウサ	2
バミレケ	6	バファン	1
バッサ	3		

ソーセージに豚肉は入っていないか、と尋ねる声ができることもある。鳥肉や牛肉入りを使う。中国からもカメルーンの土地の文化への尊重や認識が、商売であるからこそ、進んでくる（写真12）。

下町で一番のホテルを、中国系が手にしたことはその象徴的な意味においてもプレゼンスが大きい。中国からカメルーンに医療の分野でもその援助協力が増大し、首都ヤウンデ近くや北部ギデルにも中国援助で病院が設立されたことは、1章で述べた。この交流関係にそって、公式の病院でももちろん西洋医療と中国医療が併用されるのだが、中国系の民間医療機関もやってくる。アヒジョ通りにも「孔医生」という看板を出して中国医療を実践している（写真2）。アヒジョ通りから1本北の通りに入れば何軒も中医関係の施設が看板を出して診療している。中国医療のプレゼンスはきわめて大きい。

中国店舗と非中国店舗の割合を見てみよう。アヒジョ通りの両側の全ての店舗を調べられたわけではないので、決定的な結論を出せるものではない。抜けている店舗もある。番号上飛んでいる番地もあり、抜けている。こうした未調査の店舗所有状況を多く含むのだが、30～40年前には中国系の店は1軒もなかった状況に比べると、一定の国際化の中身の傾向や趨勢は把握できる。チェックしえた確認済み店舗の数で、

中国系と非中国系を単純に数えてみる。非中国系には、今までのレバシリ人やバミレケのカメルーン人などを含む。たとえば、金芝国際商業中心や中喀友好樓のなかに何軒の中国人店舗があるかまだ調査していない。なので、これも1軒と数える。このように概略化した数字ではあるが、中国系の店と非中国系の店を数えると、中国系店舗が126軒、非中国系店舗が73軒である。通りを遠くから見た目の印象、通りを歩く人たちがかつて目に映る印象としてほとんどアフリカ人一色だったものが、中国人の商店数が増加し、中国系が目立つ印象を裏付けている（図2参照）。

店舗で扱う商品の中味を見てみよう。ホテルや中華料理店は大規模店が多い。ショッピング・センターや集中商業地も中国系が増えているが、そのテナントとしての各店舗は、雑貨店が多い。この中国雑貨の店がここ数年（2018年時点で）、急増している。衣服、装飾品、文具、造花、靴、かばん、中国飲料、菓子、酒タバコ、ガラス製品、室内装飾品、食器など、典型的な雑貨であり、廉価商品それも中国製の圧倒的な安さで作られた製品を持ち込んでいる。雑貨では、今までのバミレケを中心としたカメルーン商店は太刀打ちできず、多く撤退した。同じバミレケ系のBaham人の女性店主が経営する中小規模の室内用品を扱う雑貨店などのように、踏ん張っているカメルーン人商人の店舗もある。

これに対して、「レバシリ」人が扱う商品は、発電機、電化製品、空調機器、家具や台所シンク、壁材・建材、タイヤなどの大型商品を扱う店や、金属専門店など高額商品を扱う店が多い。かつては時計・貴金属なども扱う店があったが撤退し、中国人の雑貨店に変わっている。スポーツ・自転車など近年の流行に絡む新しい流れの商品も、レバシリ系で扱う店舗が出てきた。バミレケ人はかつてからのカジノ経営、ガソリン・ス



写真12 カメルーン化する中国料理。
中国もカメルーンに寄ってくる

ランド、モーター・電源店、建築材、高級織物、電線・ワイヤ、テレビ・毛布などを扱っている。この比較から、扱う商品が小さく、廉価に、あれやこれや、になれば中国人が中国製を持ち込んで商売しており、商品が大型になり高価に高度な商品になるほど、非中国系の店舗が継続している、という実態が見えてくる。

4-2 ドアラで組織化が進む中国人アソシエーション

首都ヤウンデよりドアラで中国人の活動がより活発化し、その民族結社のグルーピングも進んでいる。カメルーンでの中国人結社は、その組織化が認められるドアラの3つのメジャーな流れによる。まず第1番目は、Chinese General Association of Industry and Commerce of Cameroon 喀麦隆華僑華人工商総会である。これは、在カメルーン中国人商人ビジネスマンの商行為を統括し、かれらにとって好ましいビジネス環境を創生していく組織である。2000年の統合がうまくいかなかったことを受けて、2005年11月に結成されている。その会合で、次の役員が選ばれている。Na'aisi Companyの社長 general manager 納愛斯公司総経理である Chen Boson 陳伯松 チェン・ボゾンを、会長に選出した。後は第1副会長と第2副会長である。第1副会長には、やはり同じくドアラ在住で、Haida Fisheries Companyの社長 general manager 海達漁業公司総経理である Yuan Yulong 袁玉龍が着任した。第2副会長は3人いる。ドアラ一番の目抜き通り Boulevard d'Ahmadou Ahijo アヒジョ通りに大ショッピングセンター中国商城を開店している社長 general manager 総経理の Wang Fengyu 汪風玉である。2番目は、Wanfu Companyの社長 general manager 万福公司総経理である Zhang Guicheng 張貴成である。3番目は、やはりドアラの第1目抜き通りアヒジョ通りに出店している Asia-Africa Company 亜

非公司の社長 general manager 総経理である Li Jiaxiang 李桂香である。こうして、ヤウンデよりもドアラを中心に、しかも中国人の出店が実際に多いアヒジョ通りやドゥーシュ地区を中心に中国人の組織化を図っている。

5 中華街の形成と街並み保存の関係 —過去完了の文化遺産保護か現在進行形の都市商業文化の推進か

侵食されるカメルーン性と民族文化性

このように、ドアラきっての目抜き通りアヒジョ通りの歴史的に蓄積されてきたカメルーン性と民族性が、急激で強大な中国エネルギーの流入を受けていることが判明する。その流れはあまりに急峻・膨大であるが故に、民衆生活の目からは一種の「暴力」とうつることも無理ない側面をもつ。流入は、一種の侵食となっている。

5-1 都市における民族特性の開放性と持続性—民族文化の動態的特徴

ただ、ここで、都市で民衆が生き抜いていくことを考えてみよう。中下層の都市民衆は、その文化的価値ある歴史的蓄積、つまり「過去完了」を強く意識できる余裕があるわけではない。ふかく深呼吸といった思念の確認の瞬間は少ない。日々のやりくりで手一杯である。つまり、過去完了よりも生活の「現在進行形」で必死である。

そこで、都市における民族文化や伝統文化の継続を考えてみよう。カメルーン最大都市ドアラに移り住んだ地方民バムン人たちが、この巨大都市でどのように生きているのか。中下層の都市民衆の生活共同のあり方を、その民族結社の組み方で見てみよう。

カメルーンには、首都ヤウンデを含む Central 州、最大都市ドアラを含む Littoral 州、バムン人バミレケ人が住む西部の Ouest 州、森

林地帯を含む東部の Est 州、半砂漠・砂漠の乾燥地帯の北部 Nord 州、チャドと国境を共有する最北部の Extrême-Nord 州などに分かれている。この西部 Ouest 州の中心都市は、バミレケ側のバフサン市とバムン側のフンバン市である。バムン側はヌン県という県になっている。県都フンバンの周りにある諸町村からフンバンにも出てくるし、さらに就業を求めて最大都市ドアラにもバムン民衆がやってくる。マンキ村、その近隣にある少し大きな町マッパ、県都フンバンなどからドアラに移り住む。だが、定職につけるものはごく限られた人数である。経済的に中下層、下層民がほとんどだから、生活互助が要る。ヤウンデやドアラの大都市にはこうした地方民や他国からの民族結社が、多く結成されている。

ドアラにバムン民族の互助結社がある。バムン県マンキ村出身者による互助講である。プオムシャ・マンキという。プオムシャとは、バムン語で結社や寄り合い、集会のことである。正式名称は、プオムシャ・マタラム・マンキという。その意味は「私はマンキ村を忘れない」講である（表2参照）。ほとんどの成員が、アヒジョ通りの1本裏の借家街と、ドゥーシュ地区、その先にあるカルチエ・コンゴに住んでいる。マンキ村の互助講というものの、マゲンファやマシュマヌなど、マンキ村の隣りの諸村から、この互助講に加わっている。近くの町、マッパ町やマラントウアン町からも参加している。バムン県の2つの都市フンバンとフンボット出身者もメンバーである。それだけではない。バムン人の、さらに限定された村出身者互助講でありながら、バムン人以外の民族、バミレケ人、バッサ人、バファン人、ハウサ人などが、このバムン互助講のメンバーとなっている。この講の開会の挨拶には、バムン・マンキ流にイスラームにのっとなって会員の安寧と村・バムン民族の繁栄を念ずる祈りがささげられる。民族性が

前面に出る。にもかかわらず、他民族が参加してともに大都市での困窮状況を共同して突破しあう。これが、現在進行形で大都市を生き抜く力である。この進行形がなければ、文化は衰退し忘れられどこかに胡散霧消する。過去完了には、現在進行形の推進力が要る。

そこで、ドアラの伝統文化とはなんだろう。最大都市ドアラの土地っ子地元民はドアラ民族、ドアラ人である。ドアラの民族的な伝統家屋といえば、バナナの木や幹を使った、また熱帯雨林の原木を板状に切り、それを重ねるように組み合わせた家屋である（図3）。熱帯の暑気を風通しによって逃し下げる工夫がある。つまり、こうしたドアラの木造家屋による伝統性は、ドアラ目抜き通りの街並みの建造様式に反映しているわけではない。ただ、裏通りに行くと、今でも民衆家屋はこの組み合わせ板による木造建築ばかりになる。もともと港を中心とした集落を中心に発展し、マンガ首長が地元首長として勢力を張った時期もある。ただ、ドアラは、マンガ王族の首長集落として発展したのではなく、その町性への充実と都市への発展は、植民地期に英仏の植民拠点としての陣地形成から、港近くから今でいうアヒジョ大統領通りとリベルテ通りの2本のメイン道路がT字状に整備された。そして空港としての滑走路を作った。この巨大集落への人口集中は、ドアラ人のほか



図3 ドアラ環境にあった文化民俗
Guy MAINET 1985 "Douala-croissance et servitudes"
Paris, Edition l'Harmattan, p.450 より

に比較的この地に近いバッサ人や、移動商人のバミレケ人、イスラーム系のハウサ商人やセネガル、ギニア、マリ人やマンデ系商人が、イスラーム宗教商業地域としてこのあたりに集住するようになった。こうしてドゥーシュ地区がカルチエ街区として生成発展していった。

その人口拡大の動態を、ドアラ都市の初期の1980年当時の定住者の出身地から見てみよう（図4参照）。図は、ドアラの都市形成の初期にここに移り住んだ民族構成を示している。塗りつぶしてあるのが、ドアラ近辺からの Litoral 出身者である。横線で示したのは、バミレケバムンを含んだ西部州出身者である。縦線はその他の民族であり、白色はこの地の漁業を営んでいた土地っ子のドアラ人である。また外国人も含んでいる。こうしてみると、ドアラの都市形成にドアラ人の占める割合が多くない。バミレケを中心とした西部州からこの地に移り住んだ人たちが多いことがわかる。つまり、ドアラ都市伝統は、ドアラ人以外の多くの他民族が構成

して形づくっており、こうした人たちが地域や職場で共同してドアラ性やこの地の都市伝統を形作ってきた。ドアラ性は、ドアラ以外の力によって生成・継承されてきたのである。

5-2 理論的検証を交わせる—文化継承のメカニズムとトポスの生成

「残るトポスと消え去る場所」論

ある場所に意味が生じれば大切にそれを思いに託して人は生きる。この意味を含んだ場所をトポスという。この反対は、多くの人が集まりながら、意味とは逆の単なる通過のみで出会いのない非場所になる¹²⁾。

そこを活かし続けることが重要である。使い続けられれば、いつかそれを過去や歴史として掘り起こす時期が来る。意味を過去に立ち返って掘り出し、現在に貼り付ける。ここは、こういう「いわれ」「歴史・過去」「由緒」がある場所ですよ、と過去と現在を結びつけて蓄積に再度焦点を当てる。こうしたことが可能となるためには、ここを使い続けていなくてはならない。消えうせさせてはならない。都市は、生々流転が激しい社会である。いろんなものが消えていく社会である。ハードでもソフトでもそうである。箱物のハードが同じでも、それを使う意味やソフトが違ってくことは、しばしばあり、むしろその方が自然である。時代の流行やその時代を生



図4 西部 Ouest 州から移住者多いドアラ
Guy MAINET 1985 “Douala-croissance et servitudes”
Paris, Edition l'Harmattan, p.362 より

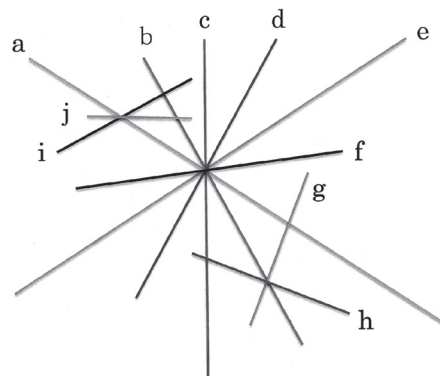


図5 残るトポスと消え去る場所

きる最大価値、最大関心事に常にキャッチアップし、経済的にも存在的にも生ききっていかなければならない。

図「残るトポスと消え去る場所」を見てみよう（図5参照）。アルファベットeの機能で使われた場所は、1地点しかない。e人が使用したと呼び変えても良い。aやfの用途にも使われているところである。ほかを注目すると、bjの両線が交わるところがある。aijの交わる箇所がある。これを歴史的なプロセスとして見てみよう。abcdefが交わるポイントをポイントA（「アヒジョ通り」）と名づけよう。要素aはドアラ土着文化、bはバミレケ性、cはレバシリ性、dはドイツ・イギリス・フランスのヨーロッパ植民地文化、eは中国文化だと仮に措定しよう。ポイントAは、まずaの用途に使われ、次いでb人がやってきて使用した。さらに、cのキプロス・ギリシャ・レバノンの商人がこの地に多く移り住み活用した。bやcの流入とほぼ時を同じくして、dのヨーロッパ植民地文化が入ってきた。この目抜き通りをヨーロッパの経済力が整備した。ここを利用して、富豪バミレケ商人のbやcのレバシリ商人が事業を展開してきた。

aijの交わる箇所をポイントB、bjの両線が交わる場所をポイントCと名づけよう。ポイントAに対し、ポイントBはまだ使われている。例えば、アヒジョ通りの1本北側の裏道は、トルコ系と称するケバブ屋が何軒も集まり小商店や食堂が連続して賑わっている。ケバブ屋通りとして名を馳せている。そこには人は行く。ポイントCになると最新の使われ方がなくなり、その場所は忘れ去られていく。由緒化されない。使われなくなった場所は、民衆の記憶から遠ざかり、その場所の貴重さも薄らいでいく。だから、無理に残すしかない。文化遺産や歴史遺産を認定したりこれに向けてドライブをかけて行くとき、残らないから無理にお金を過剰にかけ

て残すことがよくある。世界遺産や文化遺産の考え方を。再考していかなければならない。陳列館やガラス張りの中に、実際の使われている姿とはちがって、固定した静態として留め置かれる。反対に、生活はすべて動態である。揺れ動いており、変化し、新要素がどんどん参入・闖入し、新規性が混ざる。新規性にとって代わられることも普通である。山車や鉾は、陳列されて意味をもつものではなく、祭りに使われて意味を持つ。

したがって、伝統文化の持続力として、文化遺産や文化財保存を考えてみる必要がある。何か最初から「大事な」物というのは、無理がある。これは大事だ貴重だといって、使われてもいないのに、かつての有用性からガラス張りの陳列棚にとどめおいたりする。こうしたもの以上に、現在使われていて実質的な現実機能や役割をもつものは、社会が、世間が、民衆が必要とし使い続けていることになる。だから、一番強い形で生活の中に「残り」続けている。

このように考えると、ドアラの伝統ある目抜き通り・アヒジョ大統領通りは、もちろん最大都市ドアラの2大道路の1つとして、初代大統領の名「由緒」を冠してつけられた。銅像が建っているわけではない。ドゥーシュ（水道の跡）があるだけである。のに、その由緒性をしっかりと保有している。その近くに当初ドアラ民衆の家屋が木製の板重ねから建立され、この地に住んで来た。そこへバミレケ商人や富裕な外国からのレバシリ商人がこの地で商売をし、居宅や商店をこの通りに構えた。その裏通りを中心に、表通りにもバムン人やバッサ人もここに移り住んだ。そこへ、近年中国からの巨大なエネルギーがやってきて店舗利用を發展させ、その勢いは増すことすらあれ減じない。ますます發展している。中華街が形成される、そのプロセスを私は検証していることになる。だが、この現在進行形の巨大な力があるから、この「通り」

は今も昔と変わらぬアヒジョ通りと称して使われ続け意味を運び続けている。

同時に、この中国系商店の集中による街形成は、文化創造も果たす。クツ・カバン・雑貨を扱う中国系商店の奥の路地に、または路上に、小店舗を借りる者から数足を持って立ち売りする者まで、大量のカメルーン人たちのクツ・カバン・雑貨売りが、アヒジョ通りに集結するようになり、今までになかったカメルーン人民衆商業の活性を生み出している。クツ・カバン・雑貨といえば「アヒジョ通り」「ドゥーシュ」と呼ばれるようになった。都市商業文化が生成されているのである（写真13）。中国文化がこの通りの伝統を破壊しているのではない。カメルーン民衆も中国民衆も、ともに、こぞって、民衆が生活として生きようとする自己が、文化の持続と継承にとって破壊を伴いつつも最

も力強い伝承力となる（写真14）。

あるものを消し去り新たなものを持ち込み、そこに混交を生じさせて文化を生成継承している。文化破壊と文化創造を同時に行い、それによって文化継承をおこなっているのである。

むすび：カメルーン—中国関係から見る文化財保存—街並み保存をどう考えるか

＜原点に架ける輪ゴム＞理論

—文化破壊と文化創造と文化継承の同時生成
Static Protection 静態的保護より Dynamic Preservation 動態的保存

世界遺産や歴史遺産の登録の作業を、地元生活者と、権威と権限をもつ認定者と、仲介の政府・公組織との3者関係で見てみよう。すると、遺産化されたり、文化財として登録されたりするものは、過去のままなどということは、ほとんどない。かつて、過去の時代に生きた「あいうえお」連合としての歴史物は、そのまま遺産化されるのではない。現在のある時点で注目が集まると、過去を張り下げる作業を行う。このとき、選別化がおこなわれる。つまり、「あいうえお」の全要素が今残っているなどということは、まず皆無であり、「うえ」だけを過去の姿として遺産化・文化財化して認定する。このとき、その土地やコミュニティの、さらにその地を応援する政府やJICAや仲介国際機関・公機関は、地元を応援するあまり、過剰の脚色をも過去の姿そのものと捏造してしまう。地元からの創造・捏造を含む申し出をそのまま意識的に承認してしまうことがほとんどである。それを推奨することさえある。つまり、過去を発掘する作業は、選別的であり、しかも追加的である。捏造や文化創造が当たり前であり、そうであるがゆえにその地の文化は勢いと喜びをもって再生され未来に向かって生き続けることができる。「うえ」に、歴史にはなかった、あ



写真13 中華街形成が生み出した
カメルーン民衆商業文化



写真14 中国人もカメルーン人も
中小商売で懸命に生きる

るいは少し関わりのあった「か」や「と」が付加えられることがよくある。「うえかと」があたかも純粋な歴史物であるかのように再現される。それは「いかにも歴史」「いかにも伝統」という脚色と装飾をともなうて新生される。世界遺産や文化財化は、歴史にあった姿の一部分を再生し新しい新規の価値ある文化要素を足して勢いよく現在に固定される、進行形の文化創造運動なのである。そうだからこそ、地元の歴史的意義ある文化は、地元民の心の充足と維持モチベーションの充溢をもって、未来に向けて歴史をつないでいくことができる。世界遺産に認定された飛騨の高山祭も、神社の異なる2つの春祭りと秋祭りを合わせ、新たな「高山祭」として認定されている。

そうであるならば、そのように現在進行形であるからこそ、過去完了としての文化財化や歴史遺産化だけを求める必要は、まったくない。過剰なエネルギーが働いているからである。今、何かの形で意味が付与され有意義化して生きていくのが、もっとも自然な文化維持、伝統維持の方法であり手立てである。だから、バミレケ・カメルーン文化とレバシリ（レバノン・キプロス・ギリシャ）文化とヨーロッパ植民地文化が支え意味づけていたアヒジョ通りの文化遺産は、今中国人の巨大なエネルギーの流入に破壊されつつ維持されているのである。そして新しい中華街が形成されつつあり、文化創造がなされつつある。これも「あいうえお」歴史物を、「あ」も「い」も「お」も無いが、創造的・継承的「うえと」として、都市民衆生活がそれなりに繁盛しながら、人々が喰えながら生きていく生活の戦略性である。政府が巨大な建物を無用な長物なのに建てなくても、民衆が生きる術の生活文化を通して残していつてくれる。変化しながら歴史と過去は生き続ける¹³⁾。これを私は、伝統維持における「一点の針に輪ゴムをかける」メカニズムと呼んでいる¹⁴⁾。一点の

歴史的、伝統的要素が確保されていれば、そこにいかに新規・珍奇で真新しい捏造物が架けられたとしても、それは、「伝統」「歴史物」として人々に認識されやすい。あるいは「騙せる」。人々は、観光旅行者は、うっとり騙して欲しいのだ。ここで、「うかと」が「う」だけ本当で後は偽者・まがい物などと言って欲しくない。「全部伝統だ」「全部ひっくりめて真の遺産」だと言って旅行者や外来者は騙して欲しい。その凄さに、凄さの本物に包まれに、観光旅行者はそこに行っているからである。

現在を生きるための遠くに伸び縮みする輪ゴムをかけて、現在・今を充足させる機能や役割や意味づけを持ち込めばよい。一端、伝統原点の、遺産原点の針に架けてしまえば、歴史的実在から遠く離れるようにゴムは現在・未来の意味に伸びていくことができる。過去を装いながら、今を生きる。祖先と子孫は、私を通して結びつく。人が生きていくというのは、こういうことである。しかも、この輪ゴムは何本でも架けられる。このように、その時々の意味や必要物を満たしてきたから、変化しつつ歴史的継続が果たされたのである。ギリシャ人が商売したいというなら受け入れる。バミレケが建物を買って経営したいなら受け入れてきた。そして今、西洋による植民地化のあと、新参の中国文化が怒涛の勢いをもって、カメルーン民衆に反発の喚起とともに文化継承と文化破壊創造の両方をもたらす結果を導いている。

こうして、アヒジョ大統領通りは、生き生きした活性をもって人々の記憶にとどまり続け、未来に向けて生き続ける。市民的な力がないものは、廃れる。多様な意味づけが重なり合い、蓄積しうるかが問われている。閉じているだけでは、文化はいずれ滅びる。「他者の吸引による自己維持の連続」が図られる。巨大な文化財施設が文化を支え伝えるのではない。民衆や人々の生活営為や文化が文化継承装

置（つまり文化実践や博物館）を支えるのである¹⁵⁾。すなわち、文化遺産や文化財の保存継承には、過去完了を汲みあげ過去をそのまま残す Static Protection 静態的保護よりも、現在進行形と交わり今生きる力を混入した Dynamic Preservation 動態的保存の力を再評価することが求められるのである。

【付記】

本論は、科学研究費補助金「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティに関する人類学的研究」（基盤A、代表・吉田憲司国立民族学博物館長、15H01910番）の成果の一部である。

【注】

- 1) 松本尚之は、特に東アジアがアフリカにとって魅力ある目的地となっており、その日本での商業動態を詳しく論じている（『在日アフリカ人と東アジア交易—ヒップホップ文化をめぐる人とモノの移動』『移動と移民—複数社会を結ぶ人びとの動態』栗田和明編、昭和堂、2018年、203—222頁）
セネガル—中国の関係については、榎並ゆかり「アフリカからアジアへ移動する『新興』の交易ディアスポラ—広州・ドバイにおけるムリッド商人の活動事例から」『移民政策研究』第8号、2016年、123—137頁、参照。また、
三島禎子は、セネガルを中心としたソニンケ商人のアジアへの脱出展開を論じている（三島禎子「ソニンケにとってのディアスポラ—アジアへの移動と経済活動の実態」『国立民族学博物館研究報告』27巻1号、2001年、121—157頁、参照。
Haruka WAZAKI 2015 'Life Strategy of Africans living or staying in Japan, China and Korea' "Crossing and Hybridity in African Societies and Cultures" the fifth IAS Humanities Korea International conference, held in Korean University of Foreign Studies, pp.31-38. において、日中韓の東アジア3国に多くのアフリカ人が滞留し、台湾を含め東アジアがアフリカの新しいチャンスの地となっていることを報告した。
- 2) 和崎春日「日本—カメルーン往還の交流史—東京オリンピックから滞日アフリカ人まで」『貿易風』Vol.8、中部大学国際関係学部、2013年、243—254頁、で日本—カメルーン関係を、個人史的視点を入れて、検証している。
- 3) 日本アフリカ学会は「アフリカ新商売往来：

Money-Go-Round—中国のアフリカ攻勢とアフリカの狡知・知恵」という第54回学術大会シンポジウムを信州大学で行った（2017年5月21日、信州大学）。これは、アフリカ—中国の拡大深化したまさに現在の交流状況を捉えたものである。ここで、平野克己「China in Africa: 中国はアフリカで何をしているか」は、アフリカにおける中国のプレゼンス拡大が植民地時代における旧宗主国のそれをしてのぐスピードと規模で進んできたことを論じている。

- 4) 和崎春日「国民社会のなかのアフリカ伝統都市—現代ネットワークのなかのバムン伝統都市性」『アフリカの都市的世界』嶋田義仁・松田素二・和崎春日共編、世界思想社、2001年、32—55頁、で、フィジルやングアウンデレなどギデル近辺の北部カメルーンにも多く出稼ぎに出ていることを報告している。
- 5) Jean-Pierre Cabestan 2014 'China-Cameroon relations: Fortunes and Limits of an old political complicity' "South African Journal of International Affairs" p.6
- 6) 上掲書（5）p.17
- 7) 上掲書（5）pp.17-18
- 8) Ngwa-Niba, Francis (2000-8-23) "Chinese in Cameroon do healthy trade" BBC News, retrieved 2009-04-06
- 9) li A 'Chinese medical co-operation in Africa, with special emphasis on the medical teams and anti-malaria campaign' Nordiska Afrikainstitute, Uppsala, Discussion Paper 52, 2011, pp.7-24.
- 10) セルジュ・ミシェル、ミシェル・ブーレ著『アフリカを食い荒らす中国』、中平信也訳、河出書房新社、2009年（Serge Michel et Michel Beuret, 2008 "La Chinafrique" Grasset et Fasquelle, Paris, Grasset Fayard）。
- 11) フランス人ジャーナリストはやや扇情的な評し方をしているが、こうした実態についてはいくつもの報告があるので、こうした実態があると考えてよいだろう。例えば、Ndjio B, 'Shanghai beauties' and African desires: Migration, trade and Chinese prostitution in Cameroon' "the European Journal of Development Research" suppl. 'Special Issue: China in Africa: a Relation in transition' 21-4, September 2009, pp.606-21.
- 12) Augé, M. 1992 "Non-Lieux : Introduction d'une anthropologie de la surmodernité". Paris, Edition du Seuil. は、非場所を空港のロビー、巨大スーパー、ショッピング・モール、規格化した駅ビルなど、人は集まるが人びとを結びつけない場所と規定してい

る。

- 13) 栗田和明「人の移動の普遍性—一定住者の視点を離れて」『移動と移民—複数社会を結ぶ人びとの動態』栗田和明編、昭和堂、3—26ページ、で中国・広州のタンザニア人が集まるレストランの所有者・居住者は代替わりして変わっても、つまり、使用者が変わっても、そのレストランが民族の結節点となり続けることを論じている。アヒジョ大統領通りも活用者や利用形態が代わっても、一点の歴史的継続性を、活性を帯びて、伝承し続けることが出来る。

和崎春日「韓国滞留アフリカ人の移動と集合—首都ソウルのイテウォンと郊外アンサンと比較から」『移動と移民—複数社会を結ぶ人びとの動態』栗田和明編、昭和堂、2018年3月、115—143頁、においても、カメルーン人が故郷の連合とは異なる変形を施しながら、ソウルでカメルーン性を持続させていることを論じた。

- 14) 和崎春日『左大文字の都市人類学』弘文堂、1987年、187—226ページ。ここで祭りや儀礼が本来の意味から拡大発展し、宗教的取り込みや祝祭的取り込みを行って、現在に合致した伝統祭礼になっていることを論じている。総合的には、和崎春日『大文字祭礼の都市人類学的研究』刀水書房、1993年を参照。
- 15) 和崎春日「生きている博物館『祭り』からユニバーサル・ミュージアムを考える」『ユニバーサル・ミュージアム』広瀬浩二郎編著、国立民族学博物館監修、読書工房、2007年、167—180頁で、実際の祭りが生きている博物館であることを論じた。